煌々恋夜～雹国恋記～

篠宮　かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
煌々恋夜～雹国恋記～

【Ｎコード】
Ｎ４５３３Ｚ

【作者名】
篠宮　かおる

【あらすじ】
とある国のとある恋物語。
人の数ほど、恋はあり、想いはある。

?.始まりは忘れ物（前書き）

すっげぇ～短いですけど。

?始まりは忘れ物

「ごめん、小蘭」

そうにっこりと笑って、私に謝ったのは、我が家の当主でもあり、私の父様でもある　奏（そう）　玲叔（れいしゅく）、３６歳の吏部の下級官吏。

私の父は極度のお人好しと言うか善人で、それでいて、常日頃から忘れ物が多い。

「謝るなら母様に謝って。母様、泣いて、拗ねて、宥めるの大変だったんだからね？」

いつもは気位の高い母様は、父様の事となると、聞き分けのない子供みたいになる。

そんな母様を宥め、父様と仲直りさせるのは私の大事な仕事。

でも、たまには勘弁してくれとも思うのも正直なところ。

だから、今日こそはと思って先手を打とうとした矢先。

「うん、だからごめんね？小蘭」

にっこりと微笑まれ、そう言われてしまえば、私が断れないのを知っていての父様の言動。

（ズッルイ！！）

海千山千と言われ、呼ばれている老臣達よりも遥かに腹黒な父様。

こうでもなければ、この宮廷では生き抜いて行けないとは知ってはいるけれど。
それでも納得いかない。
その腹いせに、私は父様譲りの顔でにっこりと微笑んだ。
「明々采館の点心で手を打ってあげる」
「ありがとう、小蘭。いい子だね」
そう言って頭を撫でてくれた父様は、銀を一枚袂から探り出し、手に乗せてくれた。
この銀一枚で一般庶民ならば、半月は楽に暮らせる。
食事はおろか、衣服や住居も楽で、より良い所で。
でも。
「彩王母様のお恵みだよ。朝たまたま道端で拾ったんだ。これで蘭菊に紅でも買ってあげて？」
中々受け取ろうとしない私に、父様は更に笑みを深め、私の手に銀を握らせ、お弁当を受け取り、ゆっくりとした足取りで吏部の方へと消えていった。
後に残されたのはとても１４歳とは思えない黒髪黒眼の小さな私と、銀一枚。

「全く、甘いんだから父様ってば」

父様は彩王母様の事なんて信じてない。

だけどこうして小さな嘘を吐くのは、私と母様との幸せで温かな三人での生活を守る為。

（仕方ない、騙されてあげましょう。）

自然と綻ぶ唇を意識しながら、私は家に帰るべく元気良く駆けだした。

奏（そう）　花蘭（ふぁらん）、１４歳。

この時の私は、恋も知らない、本当に小さな存在でした。

?.始まりは忘れ物（後書き）

相手はまだ出てきません。

?本意の見えない男（前書き）

良いのか？
コイツで・・・。

?本意の見えない男

――奏　玲叔。

この名前を知らない官吏は、間抜けで使えない若い官吏か、怠惰で、私腹を肥やす事にしか興味のない、愚かで、名前だけの貴族官吏くらいだろう。

彼は今でこそ存在感は薄いが、僅か１２歳でこの雹国の科挙に状元で合格した神童であり、現皇帝の腹違いの妹を貰い受けた男で、結婚したのは彼が１４の頃で、一方の、当時は皇女だった現帝の妹は、まだたったの４歳だった。

「おや？これはこれは麗戸部尚書ではありませんか。」

噂をすればなんとやら。

目の前には、いつの間にか、相変わらずニコニコ顔の男、――玲叔がいた。

彼は誰にも媚びずに、ただただ平穏を愛し、いつも微笑みを浮かべている。

表向きは。

「今日も良い天気ですねぇ～。」

「曇りですが・・・？」

怪訝な自分の返事に、そうですかぁ～？と、のほほんと空を見上げる彼は、手に何やら包みを持っていた。

「でもいいじゃないですか。これなら明日にでも雨が降りそうで。今年は日照りもなさそうで一安心ですよねぇ～。」

その言葉に、ハッとさせられる。

確かに今年は日照りになりそうもなければ、害虫による農被害もまだ聞いていない。

（何処まで、見抜いている・・・？）

次期宰相と呼ばれている自分より、遥かに広い視野を持っている男。

「貴方は・・・、」

「あぁ、すみません。お忙しい所を呼び止めてしまって。私はこれで。」

引き留め、以前からの疑問を問い質そうと思えば、あくまでも、自然に言葉尻を切られ、春風のようにふんわりと笑み、脚を少し引きずり、何処かへと去っていく。

彼は良くお人好し、善人、出世から外れた役人だと、よく影口を叩かれてはいるが、真実、そうであれば、彼はここにはいないだろう。

「逃げられたか・・・」

「そりゃあ逃げるだろう。奴は貴族や俺達皇家が嫌いだからな。いや、憎んでいると言った方が正しいか。」

「・・・っ、」

一人だと思い、完全に気を抜いていたところに、突如として自分の言葉に返ってきた応えに、肩が揺れた。

こんな事をするのは、あの人しかいない・・・。

「陛下、私の心臓を止めるつもりですか？」

振りかえり、ぎろりと睨めば、唯一の主君と定めた主が、小さな童女（それでも立派な貴妃）を抱きかかえ、ニヤニヤしていた。

「奴を知りたければ、奴の家族に近付く事だ。なぁ、鈴霙？」

「・・・。」

皇帝に抱きかかえられたまま、コクリと頷く幼き妃は、そして何を思ったか、突然華の様に微笑んだ。

この時の自分は、この皇帝と、あの男の繋がりを知らなかった。

全てを知ったのは、狂うような恋に落ちてからだった。

?-本意の見えない男（後書き）

しまった、名前を出し忘れた！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4533z/

煌々恋夜～雹国恋記～

2011年12月16日19時54分発行